

スイカは露地栽培では4月中下旬に定植し、7～8月にかけて収穫します。病害による被害は梅雨時からうどんこ病、つる割れ病、炭そ病、疫病などが発生し、定植後、アブラムシの発生が多いとモザイク病などのウイルス病が発生します。定植時は深植えすると立枯病の発生が多くなり、多湿な土壌では疫病などの被害が増加します。

病害編

注意する病気と対策

①モザイク病の被害

アブラムシによってキュウリモザイクウイルス、カボチャモザイクウイルスなどが感染し被害が発生します。アブラムシの多い時に育苗する場合は、寒冷紗で苗を覆って栽培します。

②つるが出て繁るころに発生するうどんこ病

スイカが大きくなり、つるが出て繁ってくる時期に発生が増加します。葉の表面に薄く白い病斑ができ、やがて白粉状の病斑に変わり、病斑部分は黄色みを帯びたぼやけた病斑となります。発病を認めたら、トリフミン水和剤、ベルコート水和剤などを散布します。

③スイカで最も被害の多い炭そ病

炭そ病は6月下旬から梅雨明けころに被害が増加します。葉に初め油のしみたような小斑点ができ、やがて暗褐色の円形となり、拡大して大型病斑になります。病斑の中央部は

灰褐色で、輪紋が見られます。茎、葉が激しく侵され、果実にも病斑ができます。茎では凹んだ病斑となり、病斑ができる、病斑部から先のつるが枯死し、株が枯れあがる可能性があります。

被害発生防止にはマルチ栽培が有効です。病斑が発生したら早めにジマンダイセン水和剤、ベルコート水和剤などの薬剤を散布します。

④疫病の症状

梅雨時から8月上旬にかけて発生し、発生すると大きな被害となります。茎葉、つる、果実に発生し、水浸状、暗緑色の病斑ができ、茎葉が熱湯をかけたようになり腐敗します。茎では紡錘形の凹んだ病斑ができ茎葉がくびれて、病斑部から上部が枯死します。果実ではやや凹んだ暗緑色で水浸状の病斑ができ、多湿時には表面に白色粉状のかびを生じます。果実は侵されると、軟腐状に腐敗します。

病原菌は土壌で伝染し、連作すると被害が増加するため、畑の水はけをよくし、マルチの使用が発生を軽減する有効な方法です。防除薬剤として、Zボルドーやジマンダイセン水和剤を予防散布するか、リドミルMZ水和剤を散布しましょう。

⑤連作を避けてつる割れ病対策を

土壌伝染性の病害でフザリウム菌の感染で発生します。スイカのつるが日中におれるようになり、根があめ色に変色し、株元の茎は黄褐色に変色して割れ目が生じ、割れ目にヤニが見られます。このような株も茎を切断すると維管束部分が褐色に変色しています。株は急速におれ



(佐古 勇 原図)



(佐古 勇 原図)



(佐古 勇 原図)



(佐古 勇 原図)



(佐古 勇 原図)



(佐古 勇 原図)

ていき、枯死します。

苗を購入する時は、接ぎ木苗を購入します。カボチャやユウガオ台木は、フザリウム菌の感染を抑制する効果があります。

病原菌は土壌中に生息しており、連作すると被害が増加するので、スイカの連作は避けることも大切です。土壌中の病原菌を除去するには太陽熱処理や、土壌くん蒸剤による土壌消毒が有効です。

害虫編

注意が必要な害虫とは!?

① 3〜5月に発生する
アブラムシ類

葉裏に体長1〜2mmで、黄色または黒緑色のワタアブラムシ、淡緑色または桃色のモモアカアブラムシなどが3〜5月に発生します。アブラムシは新芽や葉に群生して吸汁するので、新芽は次々に縮れて団子状になり、排泄物により葉が黒く汚れます。発生が多い場合は花や幼果にも発生します。また、モザイク病(CMV)を伝染するので防除が欠かせません。アブラムシの飛来を防ぐため、苗や定植後の時期は虫よけのため防虫ネットを被せることが重要で、畝面のシルバーポリマルチも効果的です。育苗時から定植時にモスピラン粒剤、アドマイヤー1粒剤、ベストガード粒剤などを施用すると、1カ月ほど効果が持続します。多発時にはダントツ水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤などをていねいに散布します。

② ウリハムシの被害とは

別名ウリバエとも呼ばれます。体

長1cmほどの黄色の成虫が飛び回り、直径1〜2cmの円を描くように葉を食べます。発生が多いと、果実表面も浅く食害し、褐色の傷がたくさん生じます。また、幼虫は体長1cmほどの黄白色のウジムシで、地下茎や根に食入します。食害が進むと株が日中しおれるようになり、枯死する場合もあります。成虫は見つけ次第捕殺します。発生が見られたら、ダントツ水溶剤を散布します。

③ 葉や花、果実を吸汁する
アザミウマ類

体長1〜2mm、黄色の細長い虫が発生します。ミナミキイロアザミウマは葉を葉脈沿いに吸汁するため、葉が光沢を帯びて銀色に光り、果実にも筋状の傷が生じます。また、ヒラズハナアザミウマやミカンキイロアザミウマが発生し、葉や花を吸汁します。アザミウマは土中で蛹（さなぎ）になるため、畝面をマルチして蛹化を防ぎます。

発生が見られたら、アファーム乳剤、スピノエース顆粒水和剤などを散布します。アザミウマ類は多くの殺虫剤に対して抵抗性を発達させているので、有効な殺虫剤に限られています。殺虫剤の選択には注意が必要です。

④ ハダニ類の発生は
梅雨明け後に注意

体長1mmほどで、赤色のカンザワハダニ、淡緑色のナミハダニが発生します。葉裏から吸汁するので、その部分が斑紋のように色が抜け、葉全体が白っぽくなったり、部分的に黄色くなったりします。発生初期には圃場の一部で黄変した葉が見られる程度ですが、発生が多くなると次第に坪状に広がり、褐変して枯死し

た被害葉が増加します。ハダニ類は高温乾燥条件を好み、梅雨明け後に特に発生が多くなるので注意してください。ハダニ類に対してはミヤコカブリダニなど土着の天敵が発生して発生が抑制されることがあるので、土着天敵に対して悪影響を及ぼす合成ピレスロイド系殺虫剤などの散布は控えます。発生が多い場合は、カネマイトフロアブル、スターマイトフロアブル、ダニサラバフロアブルなどを散布します。



※文中で紹介している農薬は、タキイでは取り扱いのないものもございます。ご了承ください。また、農薬をご使用の際は必ず登録の有無や使用方法をご確認ください。(編集部)